

「年寄りも未来が見えるのじゃ」



KDDI会長 田中 孝司
たなか たかし

「年寄りも未来が見えるのじゃ」。松本紘先生（理化学研究所理事長、京都大学第25代総長）の言葉である。

私は、今から37年前の1984年、米国スタンフォード大学院に留学した。タイトルは、現地での生活が2カ月ほど経ったところ、松本先生がスタンフォードにお越しになったので、私達夫婦が住む寮でのささやかな夕食にご招待した際に、先生が発せられた一言である。

当時、スタンフォード大学では、発売されたばかりのApple Computer社（現Apple社）の初代Macintoshを学割で買うのが、学生達のブームとなっていた。一方、コミュニティでは、インターネットやパソコン関係の技術革新や起業が相次ぎ、通信分野においては、巨大なAT&Tが分割された年である。

時代が変わりつつあるとはこういうことかと、今になって振り返れるが、その中にいると、毎日のあまりの大変化に戸惑うばかりで、この先、世の中はどうなっていくのか、リアルタイムで日本の状況が入手出来ない時代である故に、日本や会社のことが気になり、大変な不安を感じていたことを覚えている。

そんな時にタイミングよく、いらっしやっただのが松本先生だった。きっと米国で起こっ

ていることに対して、日本ではどうなっているのか、この先、未来はどうなるかと、夕食を食べながら、私は矢継ぎ早に質問したのだろう。

先生のお答えは、「お前は若いから、いろんなことが気になって不安になっているのだから。年寄りは、未来が見えるのじゃ。だから、あたふたしない」と。「若い人は、大きなことと細かいことを区別せずに見てしまう。年寄りは、細かいことをすぐ忘れる。結果、大きなことしか記憶に残らないので、その大きな変化の延長線に未来がはっきり見える。だから企業を経営する人は、みんな年寄りじゃろう」と。あまりの一刀両断の説明に、目から鱗が落ちる思いで納得した記憶がある。

あの時から、37年の歳月が経過した。変化が激しい業界に身を置くが、先生がおっしゃった一言を大事にして、大きなことと細かいことを区別して大局を見るように努めている。しかしながら、足元のことが気になって、なかなか明確な未来が見えてこない。当時の先生は、40歳過ぎでいらっしやっただが、自分は還暦を過ぎて、未だ当時の先生の境地に達せておらず、目先のことに一喜一憂する毎日である。